Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-07-28

中等教育段階での『漢詩創作指導』

岡本, 利昭

(Citation)
研究紀要 : 神戸大学附属中等 論集,4:9-14

(Issue Date)
2020-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012809

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012809

実践報告

中等教育段階での『漢詩創作指導』

Teaching Chinese Poetry in Secondary Education

岡本　利昭
OKAMOTO Toshiaki

新科目『古典探究』では，漢詩を創作することが「言語活動例」として『学習指導要領』に明記された．新科目の施行を目前に控えて,中等教育段階での漢詩創作指導を実際に行ってみた．漢詩創作指導の際の評価基準としては，平仄と押韻の達成度で評価することが有効であると感じた．

The creation of Chinese poetry was stipulated as a "language activity example" in the "Guideline for Study" in the new subject "Koten-Tankyuu". With the new subject soon to be implemented, It is considered effective to use plain (Hyousoku) and rhyme (Ouin) as scoring criteria.I tried to teach Chinese poetry creation at the secondary education stage.

キーワード：　漢詩，詩語表，漢詩創作
Key words:　Chinese poetry, poetry list, Chinese poetry creation

I　はじめに

新教育課程では,新科目「古典探究」において,「漢詩を創作すること」が言語活動例に初めて入れられた．「高等学校学習指導要領」には「古典探究」の言語活動例に「ウ　古典を読み，その語彙や表現の技法などを参考にして，和歌や俳諧，漢詩を創作したり，体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動」と書かれている．言語活動例にあげられたのであるから，漢詩創作は学習指導要領のあげる「指導事項」を達成するための代表的な言語活動と考えられよう．

しかしながら現在，漢詩創作を授業で実践している中・高等学校は極めて少ない．これには二つの理由が考えられる．一つは，指導者に漢文への関心，とりわけ作詩法への理解・関心が低いことがあげられる．次に，生徒に作品を作らせたあとにどのように評価したら良いのかという,評価の難しさが考えられる．本稿では実際に,中学生に漢詩を創作させて,いくつかの評価項目を作って,評価まで行った実践について述べてゆきたい．

II　授業の進め方

1　夏休みまでの進め方

平成 30 年度は本校 9 期生（中学二年生）に対して週一時間 国語を担当することができた．使用教科書は三省堂『現代の国語２』である．三省堂『現代の国語２』には漢詩が四編（「春暁」孟浩然 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」李白 「春望」杜甫「絶句」杜甫 ），採録されているが，鑑賞し,漢詩に慣れるためには，もう少し教材が必要なため,「峨眉山月歌」李白 「泉州道中」藤井竹外も教材として加えた．一年間の流れは図１のとおりである．

まず,李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」で,詩に親しみ,七言絶句の押韻の規則を確認した．その際,句末の「楼・州・流」の字を漢和辞典で引かせて,韻目を確認させることした．押韻については一般的には,「楼（rou）・州（syu）・流（ryu）」とローマ字で表記して，母音が共通していれば押韻してい

ると判断する，というように指導がなされることが多い．だが,この詩の場合では「楼（rou）」と「州（syu）・流（ryu）」であり，「ou」と「u」とが同じ韻ではないのではないか，という質問もしばしば生徒から出ることがある．これも漢和辞典を丁寧に引き，韻目を確認させれば，尤韻であることがわかり，納得させることができる．尤韻については,「頭」も尤韻だが，呉音の「zu」と読んでも漢音の「tou」と読んでも,「州（syu）・流（ryu）・舟（syu）」などと同じ韻と思えないという生徒は多い．押韻については漢和辞典で丁寧に韻目を調べることが大切である．

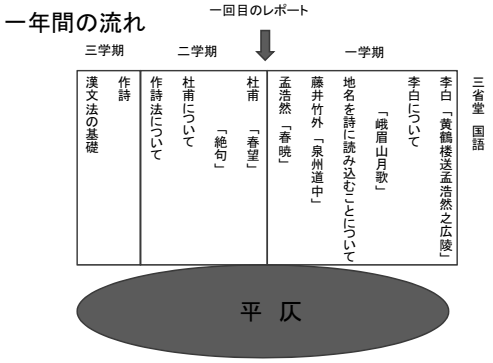


図 1　一年間の学習の流れ

次に李白の生涯について知ることをねらいにした．李白の生涯については石川忠久氏が光村図書の教科書に明快な解説を書いておられるので,光村図書の教科書を使って理解を深めた．さらに,李白の生涯の前半生を理解した上で,前期の代表作「峨眉山月歌」を鑑賞した．この詩を教材として取り上げたのは,この詩自体が固有名詞を有効に多用し,11 月ごろに予定している詩の創作の際,生徒自身の創作の参考になることを期待したためである．特に鑑賞の際,留意して指導したのは「影入平羌江水流」の承句である．「平羌江」は「青衣江」と呼ぶ方が一般的だが,敢えて「川の流れの平らかさ」を意識できるように「平羌江」という固有名詞が選択されていることに留意させた．

李白の詩の学習を承けて，日本漢詩「泉州道中」(藤井竹外)も教材とした.そのねらいは 3 点ある．まず，平仄式を理解するために，平仄がきわめて正確な日本漢詩が教材として必要なことがある．教科書に取り上げられる李白や孟浩然など盛唐の詩人の詩は，平仄式が守られていなかったり，仄声で押韻が行われたりすることがしばしばである．これでは平仄式を守らなくても，作詩ができるのではないかという誤解を初学者に与えかねない．因って，日本漢詩を教材として平仄式を学ばせた．

次に，本校の教室は大阪湾を見渡すことができる高台にあり，神戸側から泉州を対岸として見わたすことができる．普段目にしている風景を江戸時代後期の詩人が，どのように描いているのかにも気づかせたい．さらに，「泉州道中」は先に学んだ李白「峨眉山月歌」と同じく，結句で固有名詞「紀州」が「紀」という漢字の意味とともに，きわめて効果的に使われている．固有名詞の使い方を再度確認させたい．

「泉州道中」は教科書等にはあまり取り上げられないが，藤井竹外の代表作の一つである．

「泉州道中」

藤井竹外

喚取籃輿便換舟
浪華南去是平疇
西風吹白木綿国
一路穿花到紀州

（書き下し）

籃輿を喚取して便ち舟に換ふ
浪華南に去れば是れ平疇　（平疇－平野の意）
西風吹き白くす木綿の国
一路花を穿ちて紀州に到る

転句を承けての結句が，「紀州」という固有名詞で終わる巧みさに気づかせたい．授業では「泉州道中」で用いられている固有名詞を生徒にあげさせ，「浪」「華」「紀」「州」それぞれの漢字を漢和辞典を使って調べさせた．そのうえで，「転句と最も関係が深い字はどれか」を尋ねると，よく辞書を調べている複数の生徒からは，「紀」に「いとぐち・糸のはじめ・糸の先」の意があり，木綿と掛けられていることが指摘された．この詩は，仮に「信州や長州，武州」に行くのであれば面白

くも何ともないだろうが，糸の原料（木綿の花）の中を通って，糸偏でしかも「いとぐち」という意味の土地に行くという面白味がある．漢字にはそれぞれ意味があり，その意味を持つ固有名詞を巧みに風景に重ねて読み込んでいるのである．こういう詩はヨーロッパの詩では考えられないだろう．伝統的な我が国の古典詩歌に一層，したしませたいと思う．

図１にも示したが，詩を創作することを，最終的な目的にしているため,平仄に慣れることは,年間を通して繰り返し行った．本校では全員が漢和辞典（『新漢語林』大修館）を持っているので機会あるごとに漢和辞典を引かせ,その都度,引いた漢字の韻目を確認させることをした．

すると面白いことにゴールデンウィーク明けには校内保健委員会所属の生徒が生徒向けに作成したポスターに,韻目が明記されたものが現れた。(図２）これも,平仄が生徒たちの間で身近になったことの表れではないだろうか．

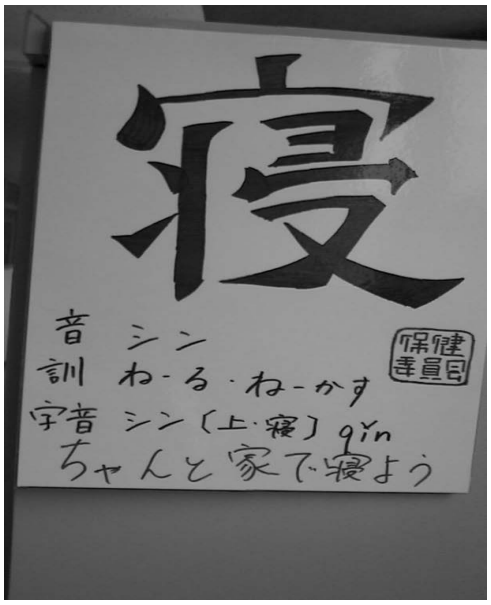


図２　保健委員会生徒作成のポスター

２　夏休みに向けて

夏休みに入る前に，「春暁」孟浩然を学習した．この作品は，人口に膾炙しておりあまりにも有名であるが，この詩も石川忠久氏が光村図書の教科書に，非常にわかりやすい解説の文章を掲載しておられるので，それを生徒に示して理解を深めた．

「春暁」は一般には，作詩の際の参考教材として意識されることは少ないだろうが，実は作詩をする際に非常に参考になる作品である．作詩をする際，転句を作ることで苦心するのだが，「春暁」は「春眠暁を覚えず　処々啼鳥を聞く」と春の朝の様子を描き，一転して「夜来風雨の声」と「暗転」する．転句の作り方はこのようにするのだ，という見本のような作品である．鑑賞だけでなく作詩にも活かしたい．

夏休みには，Ａ４一枚の宿題レポートを課すことにした．初唐から晩唐に至る四期のうちのいずれかの時期の詩人を一人取り上げ，詩人の生涯・好きな作品と読んだ感想をＡ４一枚にまとめさせた．自ら作品を探し鑑賞する機会を設けるのがねらいである．図３がその例である．

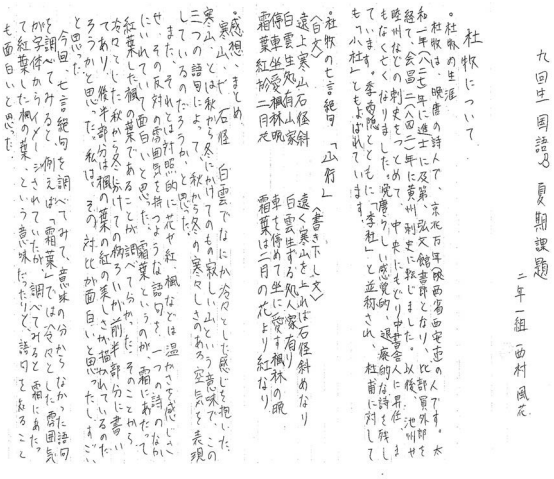

九回生　国語　夏期課題
二年一組　西村風花
杜牧について
杜牧の生涯
杜牧の七言絶句「山行」
〈合文〉
遠上寒山石径斜
白雲生処有人家
停車坐愛楓林晩
霜葉紅於二月花
〈書き下し文〉
遠く寒山を上れば石径斜めなり
白雲生ずる処人家有り
車を停めて坐に愛す楓林の晩
霜葉は二月の花より紅なり
感想
寒山とは、冬の寒々しさのある、空気を表現している語句だろうか、と思った。
三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句によって、秋から冬に向けての寒さ、冬の寒さ、この三つの語句

図３　夏季レポートの例

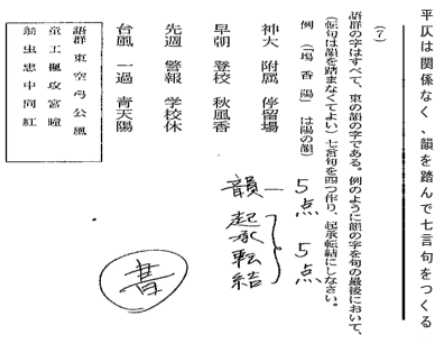
３　夏休み以後の進め方

夏休み以後は，杜甫の作品と生涯を理解した．

「李絶杜律」の言葉があるように，杜甫は律詩が名高い．因って律詩の規則と特徴の理解を「春望」を教材に深めた．詩作の場合，対句を理解することが重要となる．「春望」を教材に対句の詩の中での働きと，対句の作り方について理解を深めた．今後，詩を鑑賞する場合も対句が作る表現効果が理解できるようになることは重要なことである．

あと，作詩への階梯として，転句以外の句末を押韻する七言句（転句は押韻しない柏梁体のようなもの）を作らせた．（図４）

図４　七言句を作る



III　詩の実作

以上の経緯を経て，詩の実作に取り組んだ．前述のように，既習の「泉州道中」を使って平仄式の復習を行った．二四不同，二六同，四字目の孤平を禁ず，下三連を禁ず，反法，粘法，反法などの規則を再確認したうえで，詩語表を与え，実際に作詩をさせた．

詩語表を使って作詩を行うことは，初学者の階梯である．これは伝統的な作詩の学習方法であっる．例えば,正岡子規は非常に優れた漢詩人であるが,子規の場合も 10 歳の時，『幼学便覧』（江戸後期から明治時代の代表的な詩語集）を使って作詩していることが分かっている．詩語表を使って作詩することは,入門期の有効な手段である．

（図５図６）

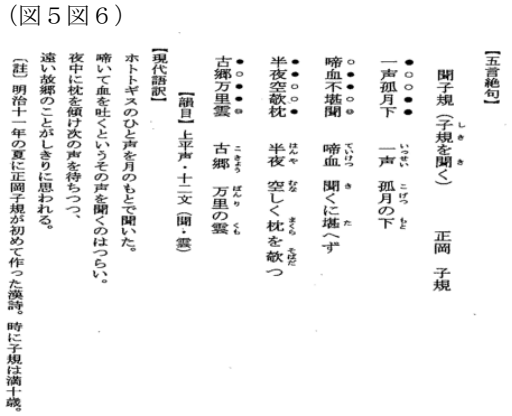


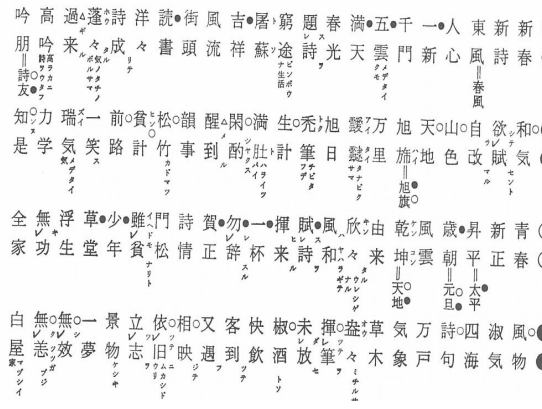
図５　正岡子規　「聞子規」

図６　『幼学便覧』子規使用の詩語に○を付す

授業では，詩語表を見て，活用しながら，作詩法になれるようにした．

授業での作詩法がどの程度定着しているかを見るために,12 月の定期考査で七言絶句の作詩を出題した．定期考査では「誰でもできる漢詩の作り方」の詩語表（図７）を問題用紙とともに与え，作詩させた．配点はおよそ半分の 49 点分とした．配点は韻の正確さ 10 点，平仄の正確さ 20 点，書き下し文ができているか 10 点，作品として鑑賞できる程度に完成しているか９点，とした．最後の作品として鑑賞できる程度に完成しているかは，転句ができているか，表現としておかしくないかを主に評価した．「評価基準」については，押韻・平仄・書き下し文が，Ａは「間違いなくできた」，Ｂは「おおむね満足できる」，Ｃは「努力を要する」と判断される場合とし，配点し採点した．

図７　実際に使用した詩語表


吟朋＝詩友●知是
高吟持アクカニフ
過来ガ瑞気ダイ
蓬々ボウルノメナヤマ
詩成リテ一笑ス
洋々前路
読書計
街頭松竹カドマツ
風流韻事
吉祥賀正
●屠蘇勿レ辞スル
窮途ビンボウナ生活
酌肚ハライイフ
題詩ス
生計
満●満
春光ヲ
秀ヒイデタ筆
旭日
●一●
満天
●五●千
雲クモタイ
門
一新
人心
東風＝春風
新詩
新春○
○
○

詩できることが分かった.

IV　創作・評価の実際

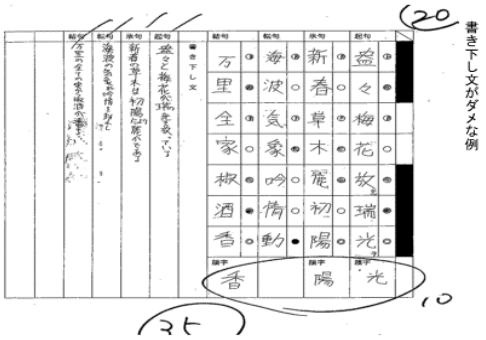
1. 書き下し文について

生徒作品でまず気になったのは,書き下し文ができていないものが少なくないことである．漢文の学習であるから,書き下し文ができるようになることが大きな目的となるのであるが，十分できていないものも多く見られた．全体の 44%が十分に書き下し文ができなかった.

これは中学二年の段階で，漢文法や書き下しの規則などをあまり学習していないことが原因と考えられる．だが，このことは同時に，漢文に触れることが少なかった中学生が，作詩をすることを通して，書き下し文の作り方に親しむきっかけとなることでもある．作詩の機会が今回が初めてであったことを勘案し，長期休暇など機会を設けて作詩を課し，漢文に親しませたい.

七言句は二字・二字・三字で分けられることは,李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」を学習したときに理解しているはずだが，実際に詩を作り,書き下し文を作るという既習知識の「応用」段階になると,活用できないのかもしれない．（図８）

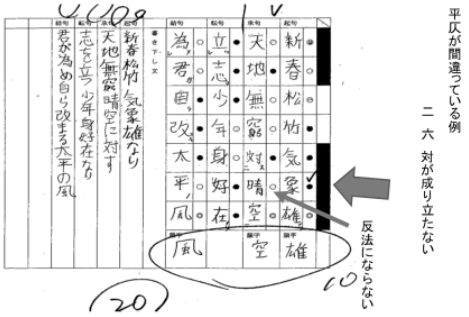
図８　生徒作品例　書き下しがダメな例



2.平仄について

平仄が正確にできなかった生徒は意外と少なく，79%の生徒が平仄を正確に作詩できた．ただ,起句で平仄をまちがってしまうと,平起式か仄起式か分からなくなってしまうので，自然と 0 点となってしまう．（図 9）このような例が 21%の生徒で見られた.

図９　平仄がまちがっている例



3.押韻について

押韻については，教科書でも詳しく説明されていることもあり，73%の生徒が正しく使えていた．押韻は中学生にとって，最も理解しやすい漢詩創作上のルールといえる．今後，学校現場で漢詩創作をする場合，多少の平仄の齟齬があったとしても，古詩だと考えれば，押韻がしっかりしていれば詩といえるわけであり，作詩は十分にどの教育現場でも実践できるのではないかという感想を持った.

IV　おわりに

作詩は一見，難しいことのように思われがちだが，作詩の規則自体は，数時間あれば理解できる程度のことである．また，詩語選びも「詩語表」を与えれば，比較的容易である．定期考査と言う限られた時間内に，ほぼすべての生徒が何らかの形で作詩をすることができたのがその証左であり，平仄・押韻を間違いなくできた生徒も少なくなく，転句をうまく考えて作品として十分に鑑賞に堪える作品を作ったものもあった．（図 10）

生徒がどの程度，作詩法の規則を理解していたかは表 1 に示した．具体的な評価基準としては，平仄・押韻・書き下し文をどの程度達成できたかとした.

図 10　平仄・韻・書き下し全てできた例

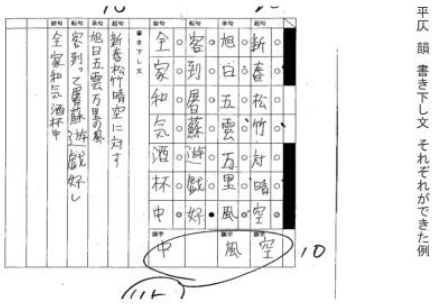


表 1 を見てみればわかるとおり，平仄は難しいように考えられがちだが，生徒は意外に正しく規則に従い作詩することができる．今回の調査では，完全に間違いなくできた生徒が 40%と多い．これは平仄の規則さえ理解できれば，詩語表を見ながら，知識を活用・応用できることを示している．新しい教育課程やＰＩＳＡ調査などを見るとき，我が国の児童・生徒の知識活用力・応用力の不足が課題として指摘され，その涵養が期待されているが，漢詩創作はその課題克服に沿ったものと言えるのかもしれない．

表 1　各項目別，生徒の得点と評価基準

表 1　各項目の得点率

得点・項目	平仄	押韻	書き下し文
20 点Ａ	40	—	—
15 点Ｂ	9	—	—
10 点Ｂ	30	73	15
5 点（８～２）	—	9	41
0 点Ｃ	21	18	44

注：　項目別の生徒の数を％で表している．書き下し文のみ 8 点から 2 点の生徒を合わせて％表示している．（全生徒数 130 名）

作詩は指導もさることながら，評価が難しい．

今回は，平仄・韻・書き下しがどの程度できているかを評価基準に採点を行った．意外に，採点はスムーズであり，特に面倒なことはなかった．採点は正誤の基準が平仄・韻・書き下しの出来具合なので，客観的で判然としており，生徒からのクレームもなく，採点基準の説明には苦労がなかった．

結語として、採点のしやすさからも、詩というものの性質からも「平仄」・「押韻」を採点基準に持ってくるのは，有効なのではないかと感じた．

謝　辞

この報告は第 61 回全附連高等学校部会研究大会（令和元年 10 月 18 日於筑波大学附属駒場高等学校）での口頭発表が骨子となっている．全附連関係の方々に大変お世話になった．厚くお礼申し上げる．また，大阪大学加地伸行名誉教授には，日ごろから日本論語教育学会で，ご指導をいただいた．厚くお礼を申し上げたい．

文　献

石川忠久 1998. 「杜甫 100 選」ＮＨＫ出版.

光村図書編集部 2018.「国語２」146-152.光村図書.

太刀掛呂山 1990 「だれにもできる漢詩の作り方」36-37 呂山詩書刊行会.

岡本利昭 2017. 1「中学校・高等学校 漢文の学習指導（ことばの授業づくりハンドブック）」（共著）195-212 渓水社

岡本利昭 2017. 5「漱石『自画に題す』を使った『韻塞ぎ』」大修館『漢文教室』203 号 13-15.

岡本利昭 2017.5「中等教育段階での漢詩指導」全国漢文教育学会『新しい漢字漢文教育』64 号 47-53

「漢詩の作り方」日原傳　全国漢文教育学会，2019 年教育講座レジュメ